

絵 米田光輪

雨が降れば傘を

住職

不要不急の外出は自粛してくださいという要請が  
出てからは、日常生活が一変しました。

「朝から晩まで子供の世話でほとほと疲れました」と  
三ヶ月の学校閉鎖で音を上げていた母親がいました。  
旅行に行きたいのに行けない人も、朝・昼・晩、家族  
の三食作りに励まさるをえないお母さんも、思うよう  
に患者の治療ができない医療関係の人もいました。や  
り場がなくイライラしてストレスのたまつた人があ  
ふれています。少しづつ改善される方向に動いてはい  
るようではあります。

自粛要請を受けて自由行動を制限される状況が長  
くなるほど各方面に影響が出てきます。感染防止策は  
人の動きが少ないほど効果があります。経済活動はこ  
れとは逆です。人や物が動くほど経済は活発になります。  
どちらに軸足をおくか、歯がゆいところです。

世界中が新型コロナウイルスに翻弄されている状  
況です。今年開催される予定であった東京オリンピッ

クも来年に延期されました。残念なことです。

地震・津波・台風など自然災害は人間の知能では及びもつかない現象です。新型コロナウイルスも同様です。積み重ねた人間の知力を一瞬にして打ち碎き、自然の強大な力を見せつけます。そんな時に私たちは「こんなはずじゃなかつたのに」と思います。

無常の世ですから日々条件は変わる。何が起きるか分からぬ人生なのに、変わらぬものと、思い込んでいる自分がいます。予定通りにならず、どのようなことが起きようとも、「その」とどう受け取るかは自分で選ぶことはできます。「この受け取り方が大切です。人生が変わります。「その」ことが自分に何を教えてくれているのか、そこから自分は何を学ぶべきか」です。「いい人生をありがとうございます」「生きさせてもらえるかどうかが決まります。ただ偶然として過ぎるわけにはいきません。コロナ感染防止には、マスク着用、外出後は手洗い・うがい、外出の自粛、集まりも三密にならないようになど自粛項目がテレビなどで広く伝えられました。自分が

人に感染させない、自分も感染しないためのルールです。しかし、残念ながらルールは人を分けます。人を分けると差別感がでます。しかも「善いことをしているという意識で生ずる差別です。ルールを守る人と守られない人に分かれます。守る人は正義の人、守らない人は不正義の人と判断されます。また必然的に、罹病した人と健康な人に分類されてしまいます。

「人間は正義に立つとどんな残酷な」とでもする作家の司馬遼太郎さんの言葉です。責任を持たない正義感ほど怖いものはありません。コロナに罹病した人は治つても人からも避けられる。コロナの医療関係者の子供たちにまで厳しい目で見られているという報道もあります。「鬼は外、福は内」がこの世の考え方です。しかし、「鬼も捨てない」生き方を仏さまは私たちに教えてくださいました。自分にとつて都合のいいことも悪いことも起きるのが人生です。他をさばき、他を責めずにはおれない生き方があります。雨が降つたら傘をさしましょう。



## 副住職



かつて龍樹菩薩は、仏道には菩薩の修行をこの世で仏に成るために自力で励む難行道と浄土に生まれ往く易行道の二つあることをお説きになられました。そして、天親菩薩の著された「浄土論」こそが、だれもが浄土に生まれて仏に成ることができるという易行道を説かれた教えであると雲鸞大師は讃えられたのです。人は皆、苦しみを除きたいと願つものですが、自ら起こす煩悩によって苦しみの連鎖から自由になることができません。そして、苦しみの原因である煩悩の中で迷い続けるしかない私のようなもののために釈尊が説かれたお経が仏説無量寿經です。また、その釈尊が説かれた阿弥陀仏の本願の教えを明らかにされたのが天親菩薩でした。そして雲鸞大師が著された「浄土論註」により弥陀の本願とは他力念佛の教えを広められましたが、最晩年は平遙山寺に移られ六七歳で往生されました。ある日の夜半、命終の時を覚つた雲鸞大師は直ぐに弟子たちを集め教誡を与えて皆で称名念佛するように仰いました。手に香炉を持ち、西を向いて座した雲鸞大師は念佛の声の中、日の出とともに往生の素願に顯す」とありますように、阿弥陀仏の浄土（報土）に生

まれる」ことができるのも往生して仏と成るという結果も阿弥陀仏の誓願によるのです。自分の力によって往生できるのではなく、すべて阿弥陀仏の本願のはたらきひとつによって往生させていただく身となるのです。そのはたらきのことを「他力」として明らかにしてくださいました。「論主の一心ととけるをば」雲鸞大師のみことには煩惱成就のわれらが他力の信とのべたもうと高僧和讃にあります。天親菩薩が「一心」ととれたものを雲鸞大師のお言葉では、煩惱まみれの私たちのための「他力の信心」と述べられたのです。また「往還向由他力」と正信偈にありますように、浄土に往生することである「往相」も、他の衆生を浄土へ導くために再びこの迷いの穢土に還つてくる「還相」も共に他力によるのだと説かれています。

雲鸞大師は山西省の石壁山玄忠寺に長く住まれて他力念佛の教えを広められましたが、最晩年は平遙山寺に移られ六七歳で往生されました。ある日の夜半、命終の時を覚つた雲鸞大師は直ぐに弟子たちを集め教誡を与えて皆で称名念佛するように仰いました。手に香炉を持ち、西を向いて座した雲鸞大師は念佛の声の中、日の出とともに往生の素懐をとげたということです。

川口昭次様が四月三十日、九十三才で往生されました。二十年ほど前「御堂さん」に掲載された文を「」に紹介します。

### 「妻が引き合わせてくれたゞ縁」

信行寺が平成十二年の四月、再建落慶法要が勤められました。法要実行委員の一人として参画させていただいた私は、堂内に響きわたるお念仏を耳にしながら、ここまで長い道のりを振り返つておりました。楽しみにしていたこの日を待たずに逝つた妻を思うと、万感胸に迫る想いでいっぱいでした。

お寺とは、戦前に「」に引っ越してきた当時からの

お付き合いです。若いころに愛読

した、吉川英治の「親鸞」の強烈な生きざまとお人柄に心を打たれました。私が、むしろ昭和三十二

年に結婚した妻の方が聞法には熱心でした。仏教婦人会や法座にも必ず参加し、次第に私もつられるようにお寺の門をくぐるようになつたのです。これはとてもうれし



いことで、丑年生まれの妻にも「ウシにひかれて信行寺まいりやな」と冗談めかしたものです。お寺の壮年会主催による「親鸞聖人、蓮如上人聖跡参拝旅行」や神戸別院での連続研修会にもふたり一緒にしました。

平成七年一月。震災から一週間。住まいの明石市は幸い被害が少なくすみました。次々に入る悲惨なニュースに、職場が心配でならなかつた私は、やつと復旧したJRに乗り込み、神戸へ入りました。電車は須磨駅までしか行けません。板宿駅からバスが出ていると聞いて、雑踏の中、ガレキを踏みしめ踏みしめ歩きました。崩壊と火事で見る影もありませんが、ここらは丁度お寺のそばです。急に気がかりになりました。そこには塀と門扉を残して、あとは何もありません。段ボールに「無事です。○○に避難しています。」と書きおきがありました。

それから数日後、早くも動き出しました。三か月後にはプレハブの仮本堂を建てて、ここを拠点に法座活動が再開されました。着の身着のままで焼け出され、坊守さんがショックで声も出なかつたほどとは思えません。三十人も入ればいっぱいの仮本堂も満堂です。

再建話もそんな門徒さんから提案されました。特に年配の方や総代さんが中心となられたそうです。門徒さん二十八人がお亡くなりになつて、助かつた中でも震災で離散した方が多く、寄付を募る建設委員さんは苦労されました。そんな時、「」住職自ら、「再建したあかつきには、みんなの手作りの法要を勤めたい。ぜひ法要委員に」と、私に要請がありました。自信はありませんでしたが、「失敗したらワシが責任とするけん。まあ、がんばってみよやないか」の一言にホッとした思いでお引き受けしました。案内状や寄進名簿の作成、懇志金額のリストアップや掲示など、震災を機に退職したはずが、かえつて忙しくなつたようです。

そんな中、暗闇に突き落とされたような出来事が起つりました。妻の発病です。お寺の起工式を手伝つた二十日後、「あと一年の命」が宣告されたのです。二十四時間付き添い、日に日に衰えてゆく妻の顔を見るのは辛かつた。そんな辛さや悲しさを、かえつて法要準備の忙しさが忘れさせてくれているようでした。

新しい本堂で、「」の再建を誰よりも楽しみにしていた妻の一周年を勤めさせていただきました。妻の引き合わせ

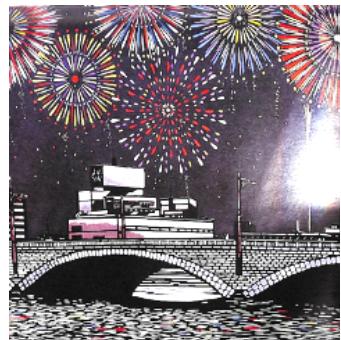
てくれた「」縁で、それこそ「法然さま」とも思える「院さんの広島弁の「」法話を聞かせていただぐのが楽しみとなつた私です。

信行寺でもつとも心に残るのは、「」住職の発案による平成十四年六月の「信行寺門信徒会」発足です。この会は浄土真宗であるという意識をもち、お念佛の教えを次世代に伝えるための活動をすることを目的としています。初代会長に谷川さん、副会長に長井さん、企画委員に川口さんなどが選任され、私も副会長として微力ながら協力することができました。そして、平成十四年七月に門信徒会会報「ほのぼの」の創刊号を発行することができました。現在、五十号を超えるまで発行できているのは、門信徒会の皆様の「」協力のおかげだと思います。「ほのぼの」の発行に際し、種々と尽力された川口さんが四月に大往生されました。川口さんは仏事に関する知識が豊富で、私達をいろいろと指導してくれました。心から感謝いたします。

月田 幹雄



# 法語カレッジ



立ち上がり力が  
念佛もすとこうに  
あたえられる

今回は、八月のことばを紹介します。

これは、西元宗助先生が「み仏の影さまざまに」のかで述べられた一文です。

西元先生は、信行寺でも度々法話していただきました。また、坊守の大学教授でもありました。

源信和尚の若い頃のエピソードがあります。若くして比叡山でもその名をとどろかせる立派なお坊さんでした。ある時、天皇の御前で經典の講義をなされ、天皇はたいそう喜ばれ、褒美を授けられました。源信和尚はそのご褒美をお母様に贈られました。「これでお母さんに恩返しができる。きっと喜んでくれる。立派に

なった私を褒めてくれる。」と考えました。ところが、お母様は、「褒美を一切受け取らず、「あなたは名譽や地位を得るために仏門に入ったのですか。世の人々の助けとなるために、仏の教えを学ぼうとしたのではありませんか。」といつた内容の手紙を送られました。源信和尚は、自らの姿勢を恥じ、改めて仏道、念佛の道を精進されたそうです。

本当の感謝とは何か。「恩に報いるとは何か。私たちは自分優先の感謝を相手に押し付けて、それで恩に報いたと勝手に納得しています。それでは本当の「感謝」「恩」とはいえません。「恩」は私が誰かに差し上げるものではなく、私が様々な方々からいただいたものだということです。いただいた「恩」であることを知つてこそ、初めて「ありがたい」「もつたいない」の心が生じるのです。

念佛も同じです。私たちが「南無阿弥陀仏」と称えることは、阿弥陀さまからいただいたお念佛であると知ることが、信心を得たということなのです。そして、及ばずながらせてできるだけお役に立ちたいと願うようになるのです。

# 日頃の疑問を考えよう

新型コロナウイルスの影響が様々などころに出ています  
が、お寺はどうのような様子ですか？

A 三月から、法話・行事などの中止や延期を余儀なくされました。現在は状況を見ながら、縮小して実施し、オンライン配信も行っています。

Q どのようにすれば、オンライン配信に参加できますか？

A オンライン配信（ズームを使います）を希望する方は、下記のメールアドレスに「〇〇〇ズーム希望」と書いてお問い合わせください。毎月の法話も配信しています。

メールアドレス  
shingyouji2020@gmail.com

新型コロナウイルス感染症に関する「念佛者」としての声明（西本願寺）を抜粋して記述しておきます。

釈尊が明らかにされた苦しみの根源である無明煩惱、また親鸞聖人が「煩惱具足の凡夫」という言葉でお示しになつた私たち人間の根源に潜む自己中心性に思いをいたし、このような時にこそ、人と喜びや悲しみを分かち合う生き

方が大切ではないでしょうか。仏教には、「あらゆるもの  
は因縁によりつながり合って存在しており、固定した実体  
はない」という「縁起」の思想があります。新型コロナウ  
イルスの感染拡大の原因は人との接触であるとされ、本来  
大切な人との「つながり」が、今は安心感ではなく、不安  
をもたらすものとなってしまっています。しかし、「つな  
がり」を表面的に捉え、危険なものと否定的に考えてはな  
りません。世界的な感染大流行という危機に直面する今だ  
からこそ、私たちは仏教に説く「つながり」の本来的な意  
味とその大きさに気づいていく必要があります。私という  
存在は、世界の人々との「つながり」の中で生きているか  
らこそ、やがて共にこの苦難を乗り越えた時、世界中の  
人々と喜びを分かち合えることでしょう。それぞれの立場  
において、「この難局で法灯や伝統を絶やさないために何が  
できるかを考え、「そのまま救いとる」とはたらいでくだ  
さるお念佛の心をいよいよいただき、共々に支え合い、力  
を合わせるのです。誰もが安心して生活できる社会を取り  
戻すことができるよう、精いっぱいの  
つとめを果たしてまいりましょう。



今年度は、新型コロナウイルスの影響で、花まつりの中止、門信徒会総会の中止（別紙お知らせをご覧下さい）、永代経法要の延期（六月末）と予定の変更を余儀なくされています。左記の予定も変更するかも知れません。確認の上、ご参加頂きたいと思います。

### ◆本堂納骨お盆法要



八月十六日（日）

### ◆夏期特別法座

八月十八日（火）

### ◆秋の彼岸法要

九月十九日（土） 天岸 浄円 先生  
二十日（日） 住職

### ◆西大谷納骨参拝

十月十八日（日）

編集委員より

いつも通り、あたりまえという訳にはいかない日々を過ごすこととなりました。孫が遊びに来るのを迎えることも、年老いた母を見舞いに行くこともできず、思い通りにならないということを知らされました。いつもご法話で聴かせていただきながら、改めて身に滲みました。でも、マイナスな事ばかりではなく、これを機に新しい挑戦も出来ました。お寺からインターネットの会議システム利用した法話会や遠く離れた人とのビデオ通話など、初めての経験を得ました。自由が発明・発見の素になると聞いたことがあります。文明の利器が発達して、研究が進んで暮らし易くなるといいと思います。今までいろいろな困難がありながら、乗り越えてきたのですから、今後も「なるようになる、なるようにしかならない」という思いです。今だからできること、今しかできないことをしながら次に進めたらいいと思います。いつ何があつても、その時出来ることをして前向きに過ごしていきたいと思いました。

石田 智子